

第九参照)後餘燼深く藏して消えざるものあり、加ふるに會社側は造船部の形勢逆堵し難きものあるため間瀬工作課長は五ヶ條の解決案を容認し乍ら、之を取計ふに敏速ならざるものありしため造船部一蹶起に氣を負へる職工は俄に硬化するところあり、和田岬の風物自ら穩ならず。曩に大勢に抗して會議を打切らんことに努力したる委員松本勇太郎氏等は、五ヶ條の解決案の第一項「解備されたる委員澁谷照男の復職の不履行」を以て見るも會社に誠意なしと呼號し、當初提出の嘆願書を要求書の形式に於て改めて提出することに決定六日早朝出勤するや一同食堂に集まり正式に是を議したる後松本外五名の交渉委員を先頭に労働歌を高唱し、工場内を練り廻れる後午前十時事務所に押寄せ間瀬課長に會見を求めたり。其示威的行列に参加したるは機械、仕上、道具工の全部にして事務所裏に於て六委員を送るに萬歳を以てして後工場内に引揚ぐ。一方六委員は課長と會見し要求書に就て逐條意見を闘はしたるが論戰は委員側の旗色頗る振はざるものあり。課長は事態斯くの如きものの當面の責任者として、六委員に其出勤を停止するの必要ある旨を申渡し、六名は退出準備中、職工一同は此事を聞きし再び食堂に參集し、龜川捷右衛門氏(二十三歳)は「委員を拘束するは不都合且暴擧なれば會社に其理由を訊さざるべからず」と宣言し一同労働歌を唱しながら事務所に蟬集し其途中警戒中の守衛、私服巡査と小競り合ひを爲し柵は倒れ双方に輕傷者を出せるの椿事あり。委員を返せ」「委員を扱束するのは横暴だ」と口々に稱へてやまず。先頭の一部は事務所内に闖入し事態穩かならざるに驚ける

會社は、即ち辯難の囚虜とせる前記六委員をして、一同に對する經過報告を命じたるに、川上委員は逐條の主張が會社の意圖の前に破れたること及委員が全部出勤停止を命せらるるに到りし經過を報告したるも、龜川氏は其報告に依る會社の説を片端より完膚なからしむる程に論破し且會社の温情主義的施設を攻撃し、更に委員を犠牲となせる會社の不條理、不誠意、横暴を痛罵し去つて後「斯かる上は我等は一層團結を固うして以て當初の目的貫徹に向つて邁進すべし」と結び、更に本岡某登壇し、士氣を鼓舞せんとしたるため會社は斯くてはならじと降壇を命じたるに職工一同は其儘工場に引上げ息業裡に退場時刻に到れり。當日發信上郷工場長の武田取締役會長宛親展書の一節左の如し。

「退場後職工一同内燃機表門前に整列労働歌を歌ひ之より港川勸業館の三義不法解備糾強演說會に向ひますと宣言し萬歳を稱へ退散致候、今日迄は可成溫和に解決せしむる主旨に依り遂に解備處分すべき旨御報致候ものも今日迄手控致居候、愈惡化の度を加へ申候に付止むを得ず嚴重處分の決心を固め、本日龜川捷右衛門に解備を申渡、宮堂、皆木の兩名に自決せしめ、三谷、寺坂、金丸、請田の四名に無期停職處分を申渡し、尙明朝は三名解備二名は停職處分申渡の豫定に御座候。今晚幹部はもとより造船所幹部共連絡するや明白に候。又明朝は入場せず一同門前に集合大々的示威運動を爲すやの如く已に旗を作り其準備怠り無きが如く、造船所職工も協同運動に出づる哉の噂も有之申候。

兎に角全部が造船所と連絡を探り協同劃策するに到りたるは甚だ遺憾とする處に有之候得共今後は息業より進んで罷業に推移を保せられず、自然持久戦に入るの覺悟を持し居申候(神戸に於ける三菱労働紛議二五、六頁)

造船工作部職工は工作課長に要求書を提出して受理せしめ得ず、同夜を協議に費し翌六日入場するや直ちに多數事務所に殺到し野村工作課長に面會し「要求書提出」の旨を述べ、要求書を手交するや同課長は要求書に職工の連名なしとの理由の下に「個人的に出すのか」と質問し、委員は「個人的で